



Title	中国におけるロックマガジンをリードする雑誌 : 『我愛搖滾樂』創刊号を読む
Author(s)	青野, 繁治
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペー パー. 2013, 2013-7, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



Osaka University
Forum on China

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2013-7

中国におけるロックマガジンをリードする雑誌

——『我愛搖滾樂』創刊号を読む——

中国摇滚乐刊物的主流

——读《我爱摇滚乐》创刊号——

青野 繁治

中国におけるロックマガジンをリードする雑誌*

『我愛搖滾樂』創刊号を読む

中国摇滚乐刊物的主流

读《我爱摇滚乐》创刊号

2013 年 10 月 15 日

青野 繁治[†]

* 本稿は 2013 年 8 月に大阪大学で開催された第七回国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境：発展・共識・危機」での提出論文を改編したものである。

† 大阪大学大学院言語文化研究科教授 562-8558 箕面市栗生間谷東8-1-1 大阪大学箕面キャンパス
s_aono@lang.osaka-u.ac.jp

筆者は中国にロックを紹介した刊行物として、『通俗歌曲』の考察を行った¹。その際、『通俗歌曲』のライバル誌としての『我愛搖滾樂』のことが常に念頭にあり、両者の関係や中国における位置づけがどう違うのか、気になっていた。

とくに『我愛搖滾樂』が創刊された 1999 年は、『通俗歌曲』がロックの専門誌に生まれ変わったその年であり、この一致は当然偶然のものではなく、さまざまな要素がからみあっていることであると考えられる。

そこで、『通俗歌曲』を念頭におきながら、『我愛搖滾樂』の概要とその意義について、考察を加え、両者の共通点、相違点などを明らかにして行きたいと考えるが、その前に『我愛搖滾樂』の創刊とその内容を明らかにしておきたい。

・『我愛搖滾樂』の創刊の背景について

『我愛搖滾樂』の創刊は、1999 年 11 月で、『通俗歌曲』がロック専門誌へと方向転換した数カ月後のことであるが、ちょうどこの月の『通俗歌曲』は、表紙のタイトルに並列するキャッチコピーとして「搖滾特刊」の文字を用い、公的にロック専門誌を表明している。同誌がそれを翌年から「中国搖滾第一刊」というコピーに変えたことは、明らかに『我愛搖滾樂』への対抗意識を剥き出しにしており、自分たちの方が先にロックの雑誌をつくったのだ、と社会にアピールしようとしている。

おそらく、このころから「搖滾」という言葉が活字媒体において、解禁されたものと考えられる。それ以前は「搖滾」という言葉を表面に出した形では、コンサートも開くことはできなかったし、大規模な情報伝達手段としての雑誌も、「搖滾」を標榜することはできなかったのである。

香取義人の「中国 ROCK データベース」によれば、1990 年に中国の初期のロックミュージシャンたちが参加して行われた中国で最初のロックフェスティバルは、「中国現代音楽会」というタイトルでしか開催できなかったし、90 年代初期にロックミュージシャン養成のために作られた迷笛現代音楽学校も「搖滾」を標榜しないことで、設立することができた、と言われている。

天安門広場の民主化運動に際し、学生たちを前にライブを行った崔健に対し、北京市当局は 2005 年まで、正式にコンサートの開催を認めなかったし、DVD やライブ盤カセットが発売されている 1990 年代初期のコンサートも、「癌患者基金」へのチャリティという名目でようやく開催されたと聞く。

そのような行政側のロックに対する警戒と抑圧の方針が、緩和されはじめたのが、どうやらこの年くらいからだったのである。

¹ <http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/dp2012-2aono.pdf>

． 創刊の目的

創刊号の第 1 ページで、主編の曉朱は次のように述べている。

「何時になったらロックは我々の社会で、真に音楽として扱われるのだろうか。我々が大人物になれる年齢に達する年まで待つのか？ いや、大人物たちがみんなロックを愛するようになる年ではなければならない。我々はどうすればそれを実現できるのか。 第一に、大人物にロックは健康的だ、と知らせることだ。それがダメなら、大人物の小さな息子にロックを好きにさせること。それもダメなら、前途ある子供たちみんなにロックを好きになってもらうことだ。そうしてそのなかの何人かが大人物になるのを待つ。

「これがわたしの拙い方法論である。これに基づいて普及工作を行わねばならない。もっといい方法があったら、教えて欲しい。

ここには、中国でロックがまだ認知されていない音楽であること、「大人物」がロックを不健康なものとして毛嫌いしていること、そして彼らロックファンがそういう状況を変えたいと思っている、そういった状況が反映されている。

また編集者の一人張勇は、ロックを愛する人々を「搖族人」と呼び、中国の 57 番目の少数民族にたとえる。

「我々は人口も少なく、生産力も低いが、性格は強情で、そのためわが民族は今日に至るも、人民代表がおらず、自治区もなく、党の温かい民族政策を享受していない。しかし我が民族の若者は一貫して党のさまざまな英明なる決議を擁護し、計画生育政策をまじめに実行し、法輪功をけん制し、李登輝を嫌っている。我々は同じ貧しく恨み深い階級出身の兄弟であり、実際、我々はあなたと同じように愛すべき人間だ。

「我々の民族音楽 ロックは、全国の人民の受け入れるところではないように見え、この点は残念なことである。我が民族は他の兄弟民族のように悠久の歴史をもたないが、我々にも民族の規律はあり、それを壊すことはできないので、お許し願いたい。

ここには自分たちのスタイルを壊すことなく、ロックファンが中国の公民として受け入れられることを願う編集者の気持ちがよくあらわれている。

二人の考え方には微妙な温度差があるが、基本的にロックファンが少数派であること、ロックが中国国内でいまだ認知されていないこと、中国国内にまだまだロックに対する偏見があることなどが、共通認識としてあったことがわかる。

それはまた、冒頭で述べた、ロックが政治的に解禁されつつあった当時の状況とも微妙に認識がずれていることを表している。『我愛搖滾樂』編集者たちのやや悲観的とも思われる認識は、ロック解禁に向けて動き出したかに見える政治状況に対して、まだそれを確実なものとして認めるまではいかないが、この流れにそって、社会的に、政治的にロックを認知させようと努力する彼

らの方向性の表れとして評価できよう。

・編集体制

雑誌の体制であるが、制作は「鐺典麗声」となっているが、仔細は不詳、出版は「中国青少年音像出版社」である。「監制：李躍 不丹、出品人：何雷 李威、宣伝：張渤洋」とクレジットされている。出版社のスタッフであろう。主編は曉朱、編輯は張勇と張翼飛、版面は張翼飛、発行総監は于小青となっている。これが編集部のメンバーであろう。さらに主筆として、黄義彤、阿飛、馬永、顔峻、孫仲旭、杭天、迭高、董鵬、郝舫、胡凌雲、王占峰、劉劭希、于微の名が見える。このなかの何人かはロックミュージシャンとして活動している人物と思われる。とりわけ顔峻は、ノイズ系のテクノ音楽を自分でも行いつつ、その方面の著作も数冊出している、この分野での大立者と言える人物である。彼の存在は、かなり『我愛搖滾樂』のカラーに大きな影響を与えていると思われる。

・創刊号の内容

『我愛搖滾樂』創刊号は、縦 280mm×横 250mm(縦は A4 版と同じ、横は B5 版の縦の長さに相当)という変則的な版形(第 16 号から A4 版に変更)で、表紙を除いて全 72 頁、ページ数こそ少ないが、文字を小さくして、多くの情報量を盛り込む工夫がなされている。目次に見える記事の数は 38 本、これらの記事内容は、まさに当時の中国におけるロックの実情を反映したもので、大変興味深い。

1) 有声音楽雑誌

最初の記事は、目次では「曲目紹介」となっているが、本編のタイトルは「本期曲目」である。表紙のタイトル下に「有声音楽雑誌 / 1999.NOV」とあるように、この雑誌は創刊の初めから CD またはカセットテープの付録があり、最初の記事として、その内容が紹介されているのである。² 90 年代の『通俗歌曲』のように、ただ活字メディアとして発行されたものでは、楽譜があったとしても、紹介されている曲自体を聞くことはできなかった。音像店に行けば、確かにポピュラー音楽やクラシック、中国の民間音楽などにまじって、ロックの CD やカセットを買うこともできた。しかしそれは必ずしも雑誌記事に紹介されていた最新のミュージシャンや曲ではないだろう。そういうロックファンの苛立ちを解消するのが、音源付き雑誌という発想だった。

創刊号のアーティストと曲目は、馬軍「放肆一把」、清晰度「改变」、沉睡「真在的語言」、智幻樂隊「影子」、敏感之花「両面」、以上のアーティストについては、曲の歌詞、アーティストのプロフィール、写真が紹介されていて、さらに CD 版限定で、「新音楽雑誌」精選と題して、5 組のアーティストの曲のさわり部分(片段)が収録され、アーティスト名とタイトル(Suede “ Everything

² CD 版(16.8 元 RMB)とカセット版(14.8 元 RMB)で値段も違った。

Will Flow ”、Placebo “ Pure Morning ” “ Every You Every Me ”、Lamb “ B Line ” “ Alien ”、張亜東 “ 只愛陌生人 ”、高旗 “ 1999 ” “ 漫遊 2003 ” “ 出發 ”)が紹介されている。ただし、高旗 “ 漫遊 2003 ” とあるのは、“ 太空 2001 遨游 ” の誤記であろう。この「新音楽雑誌」精選は、ラジオ局「北京音楽台 FM97.4」の番組「新音楽雑誌」を担当する DJ 張有待による選曲である、との但し書きがついている。ラジオの音楽番組とのコラボレーションを売りにしようとする雑誌の戦略である。「本期曲目」はさらに「特別挙薦」のコーナーで、Marc Pattison “ Idiot Box ” “ Sentinel of the Matrix ” をとりあげ、最後に「搖滾名人祠」のコーナーで、The Doors の “ The End ” の歌詞を掲載、その余白に「ギター模範曲」として Chuck Berry の名曲 “ Johnny Be Goode ” を挙げる。この曲目は雑誌の末尾の「吉他殿堂」における演奏テクニックの紹介とギタータブ譜の掲載へとつながっていく。いわば読者を、ロックを聴く側から演奏する側へと誘うような誌面構成をとったのである。

この「本期曲目」の主な執筆者は編集長の曉朱で、選曲も彼の好みが見られるように思われるが、このアーティストの選択は渋いとはいえない。なかなか一般受けしないアートロック系プログレ系が彼の好みなのだろう。それに比べると DJ 張有待はヒット性のある曲を選曲しているように思われる。フェイ・ウォンのプロデューサーとして知られる張亜東のソロアルバムからまさにそのフェイ・ウォンのヒット曲を引いてきたり、スラッシュメタルバンド超載のボーカル高旗の曲もリリースされたばかりの話題曲を選択している。ザ・ドアーズとチャック・ベリーはロックの古典であり、ロック雑誌の創刊号に相応しい選曲となっていると言えよう。

ちなみにライバル誌『通俗歌曲』が音源を付録につけるようになったのは、『我愛搖滾樂』に対抗する意味があったと思われる。音源付雑誌は、ほかにも「摩登天空」などがあり、どの雑誌が最初であるか、については、さらに調査を続行する必要がある。

2) アーティスト紹介

この雑誌のアーティスト紹介は主に 2 系列、ひとつはインタビュー、もうひとつは紹介レポートである。

インタビューは、創刊号では、「本期曲目」でも取り上げられている張亜東の DJ 張有待によるインタビュー記事「走在流行和搖滾的边界——新音楽雑誌張亜東專訪」と中国最初の女性パンクバンド、ハングオンザボックスのインタビュー記事「“ 挂在盒子上 ” 的樂隊」、「活着——王凡訪談」そして “ What’s Cool 我是城里一枝花 Flower In The Town ” の左小祖咒である。今、NHK の連続テレビ小説「あまちゃん」の主題曲で話題になっている大友良英はインタビュー「I HATE MY PAST!——大友良英訪談」(インタビューアは顔峻と李勁松)³と顔峻によるレポート「看起来是个老实人——大友良英在北京」の両方が掲載されている。これらのインタビューをここで詳しく紹介する紙幅はないが、張亜東は、フェイ・ウォンや竇唯のプロデューサーとしての活動に重点を置いた内容になっている。とくにフェイ・ウォンのアーティストとしての才能を高く評価してい

³ このインタビューは顔峻[2004]にも収録

る。ハングオンザボックスでボーカルの王悦ら3人が女子高生のとき奇抜な格好をしてバンドをはじめた経緯と、周囲の反応が語られていて、興味深い。この当時まだ彼女たちはレコードデビューしておらず、演奏の機会も多くないなかで、奇声をはりあげて、パフォーマンスすることでお金がもらえることへの戸惑いや「見せる」ことを楽しむ様子、家族の心配を気遣う様子などがうかがえるが、ドラムスの楊帆は自分たちに未来はないと、はっきり悲観的なことをいう。左小祖咒の聞き手は主筆の一人王占峰、話題は「農民は如何にして町に行ったか」となっている。左小祖咒が初めて都会に来たときの柄の服装と現在のステージ衣装やトレードマークの帽子などが主な話題である。大友良英は、顔峻のインタビューに答えて、正統派的な音楽教育を受けず、独学した音楽のこと、日本の「学院派」の代表武満徹が彼の音楽に興味を示していたことなどを語る。彼と同様に音楽理論を独学で学んだ武満を「学院派」と呼べるかどうか疑問で、むしろ武満は若い大友に自分の若いころを見ていたのではないだろうか。王凡は、86年に解放軍兵士となり、90年に復員し、2年ほど蘭州で過ごしてから、他人のより自分の歌の方が上手いと思って、歌手になったという。パンク、ヘビメタなど何でも歌ったが、「意識の流れ」歌法を始めたという。「頭の中に音楽があり、子供のころからそうなのだが、音楽が見える。見えるのは光で、光の音」と言っているが、これは音に色がついて見えたりする所謂「共感覚」のことである。そのため音楽に対する要求が高く、バックバンドが見つからなかった。3度手首を切って自殺未遂しているという。

編集者の一人である張勇は、ニューヨークツアー中の英国のダンス系テクノミュージックOrbital(軌道)のメンバーを捕まえ、彼らのインタビューを行い、その音楽の特徴、クラブミュージックとの違いを聞き出そうと試み、「穿梭在電子世界的軌道」を書いている。

こうして見ると、インタビューは新進気鋭のアーティストを的確に取り上げていると言えよう。では紹介レポートはどうだろうか。

まず主筆の一人阿飛による「誰是舌頭?」がある。1997年に新疆ウイグル自治区からやってきて、北京の西北角にある樹村に住み着いた6人の青年たちの1997年秋の初ライブから「南方週末」紙によって「1998年最も目覚ましいバンド」とされるまでを簡単にレポートしているが、レポートの後半は樹村とロックの現状が述べられており、やや内容的に散漫である。張勇は、レポートを4編書いている。「PAVEMENT 地下世界中我們說了算」「酷哥，游子，虐待狂 Howie B」「超級重量的十吨大錐 MACHINEHEAD」「搖滾的《撒旦詩篇》」である。

主筆と編集者以外では、Lukeの「曼哈頓聽樂記」(マンハッタン音楽ぶらり)がある。これは、ニューヨークタイムズ日曜版に紹介されたイベント予告にもとづいて、ライブやイベントを聴いて回ったレポートで、ブルース、ジャズ、ブロードウェイミュージカルと様々なジャンルのレポートが2頁にまとめられている。またペンネームとしいが、隨便と署名された記事「少年老成的 Buck Cherry」と「風格拼盤高手 Flaming Lips」の2編がある。

インタビューは国内のアーティストが多く、レポートは海外のアーティストが多い。それは編

集部の体制から自然にそうなるのだろうが、いずれにしても、『我愛搖滾樂』の編集部が、国内外の活躍目覚ましいアーティストに注目して記事を構成している様子が見て取れるだろう。

3) 文化批評

アーティスト紹介に次いで、重要な記事として、批評がある。ロックの雑誌だが、ロック音楽についての批評ばかりではない。様々な分野についてのものがある。「観点」というコーナーに「大煉鋼鉄」という文章がある。筆名と思われる吉祥の名で、鋭く中国社会にメスを入れる。「新しい音楽人は時計を進めたり、遅らせたり、正確に合わせるものがない。...批評家の音楽批評は言葉遊び。...中国は20年改革をやったが、昔からの内輪の消耗と外国崇拜の態度は改革しなかった。...改革開放は事実上の大躍進で、モノがあふれて、流れも速くなったので、積載超過やスピード違反に満ちている。...ロックの陣営を打ち立てるため、(『我愛搖滾樂』のような雑誌)が、CDを付けて売る必要から、「大煉鋼鉄」が行われるが、結果出てくるのはクズ鉄だ。...中国の文字書き連中は、罵ることばかりで、建設的な意見を言うものはいない。いや、建設的な意見を言うやつはいるが、その意見をきく人間がないのだ...」(要約:青野)というような具合。この雑誌自体もまな板にのせられ料理されている。同じページに筆者名無聊の「SHIT HUMOUR」がある。投稿を呼びかけてはいるが、創刊号なので、編集部で用意したと思われる笑い話集である。5つの話題は、盤古と王磊の語る南方ロックが盛んになったわけ、Nirvana と Guns N' Roses のタダ乗り競争、三つ星ホテルボーイの英語特訓、マンドリン弾きのオネエ、海賊版店見聞2題。いずれもロックファンが出合いがちな場面であるが、外国人の我々にはわかりにくいものもある。わかりやすいのは海賊店見聞のAで、外国のバンド名に笑える漢字があてられていた例だ。たとえば、Nirvana 你妈呢(母ちゃんは?)、Kiss 磕死(叩き殺す)、Metallica 莫答理她(女に構うな)、Duran Duran 都烂都烂(みんなボロボロ)、Guns N' Roses 干死个骡子(ラバが枯死)といった具合に、音は近くても意味は全く違ってくる。

「挑畔之道」と「新的反文化」は、本格的な批評である。

前者は主筆の一人郝舫の文章で、米国コロラド州のある裁判官が「騒音条例」なるものをつかったという新聞記事から説き起こし、騒音に対する認識が千差万別であること、ジャック・アタリの「音楽史は騒音を受け入れていく歴史」という言説を引用、芸術らしくない芸術が新たに生まれて、これまでの芸術に挑戦状をつきつけていることを語る。パンクロッカーの基本は汚れた奇怪な髪型、窪んだ頬、痩せた体、わざとボロボロにした服とチャラチャラしたアクセサリーであること、驚きこそ 트렌ディーと叫び、未来も美もない世界を謳いあげることとし、この美の否定から新しい美学の規準を創造するのだという。

後者は「訳/胡凌雲」とあるから、翻訳記事であるが、筆者と記事のソースは記されていない。ウッドストックやヒッピームーブメントに代表されるアメリカ60-70年代のカウンターカルチャーがその担い手とともに世を去った後に、新しいカウンターカルチャーがインターネットを舞台として登場しつつあること、lollapalooza、H.O.R.D.E.、Lilith Fairといったロック・フェスティ

バルに数万人規模のヒッピー青年が集まること、ネバダ州の砂漠で行われる Burning Man のイベントで展開されるダダイズム的パフォーマンスに 2 万人が参加したことなどを紹介し、これらに参加する若者が新しいタイプのヒッピーであること、彼らの特徴が政治的な無関心であること、彼らに政治的行動を起こさせるには、ヒップホップやヘビーメタルを禁止したり、南部の革新的なパフォーマーを投獄したりすれば、彼らはようやく手を取り合って反抗に立ち上がるだろう、と述べている。

こういった記事は、中国の若者読者に知的好奇心の満足と娯楽を提供するものであったに違いない。

4) 特集記事

さて雑誌につきものと言えば特集記事である。普通、毎号の売りとして設定されるものだが、『我愛搖滾樂』の創刊号には、はっきりとした特集は組まれていない。しかし誌面をばらばらとめくって、気がつくことがある。それは The Doors(大門楽隊)が頻繁に登場することだ。

すでに触れた「本期曲目」での、ジム・モリソンの写真と The End の歌詞に始まって、「打開這扇奇異的 Doors」と題する The Doors の紹介記事、「所謂詩歌」のコーナーでの、ジム・モリソンの歌詞の紹介と翻訳⁴とくれば、ほぼ The Doors の特集と考えてもいいくらいの内容をもっているだろう。ただ、そこで印象付けられているのは、ジム・モリソンの詩人としての素晴らしさと、カリスマ性と、バンドの他のメンバーが演出したアート・ロック的なドアーズのイメージとの奇妙な一致であって、それがジムの目指すものとは乖離するものであったため、ジムがパリに向かい客死する、という筋書きである。我々日本人のリスナーは、むしろそのことよりも、ジムが麻薬の常習者であって、それが招いた死であったことが深く印象に刻まれているため、記事にそのことが取り上げられていないのは奇異に感じるところがある。彼の書く詩が麻薬による幻覚のもたらすものであったことも、よく知られている情報であるが、それらに触れないのは、やはりまだ、検閲を意識した自己規制があったのだろうか。

5) 連載記事

雑誌につきもののアイテムには他に連載記事がある。連載記事は、一定の期間に渡って、特定のテーマについての記事を掲載するものであるから、編集者の姿勢がよく表れるものと考えられる。

たとえば、主編である暁朱の「搖滾樂的 100 個瞬間」はロックファンにロックの歴史を伝える記事として工夫されており、年代記風にロック史における重要事件を解説して行く。今回は、

1954.7.5 エルビス・プレスリー、サンレコードに入る

1955.3.21 映画「ブラックボード・ジャングル」初演

⁴ 取り上げられているのは、“ Dawn’s Highway ” “ An American Prayer ” “ Black Polished Chrome(Latino Chrome) ” “ Angel and Sailors ” の 4 編

(主題歌 Rock Around the Clock がヒット)

1955.5.21 チャック・ベリー「MYBELLENE」を録音

1955.7.9 パット・ブーンの「Ain't That A Shame」ヒットチャート入り

1955.9.14 リトル・リチャード「Tutti Frutti」を録音

1956.3.10 エルビス・プレスリー「Heartbreak Hotel」エルビス熱を引き起こす

という具合。また記事内の小コラムとして、「十大ロカビリー経典歌曲」⁵と「技術成就」⁶が紹介されている。

また暁朱は「吵死人唱片 A-Z」の連載も始めている。今回は「A」で、頭文字 A のアーティストやバンドの代表アルバムを紹介する。11 のアーティストが紹介されているが、AC/DC “High Voltage”(1976),Aerosmith“ Aerosmith’s Greatest Hits ”(1980),Alice Cooper“ Love It To Death ”(1971)が比較的有名であるのを除けば、いずれもマイナーな選択であるように思われる。この記事には編集長暁朱の色合いが濃く出ている。

連載の3番目は「藍調伝奇」で、筆者は主筆の一人杭天。自分自身もブルースの演奏家である杭天が、そのブルースについての蘊蓄を傾ける記事である。今回のテーマは「與魔鬼同行的 Robert Johnson」である。

4番目は、「爵士楽簡史」。これは Dan Morgenstern の書いたものを仲虚が中国語に翻訳した記事で、第一回では、ジャズの概要、ルーツ、ブルースの誕生、ラグタイム、ニュー・オーリンズ、初期のミュージシャン、といった内容である。

連載の最後は、瘋爵士による「MIDI 幼稚園」(上)である。これはデジタル電子楽器の規格である MIDI(Musical Instrument Digital Interface)およびデジタル機器の操作に関する入門的な知識を紹介するもので、初回は MIDI 概論として、MIDI とは何か、基本操作、GM 音源が生まれた歴史背景、GM の概要、XG 系統の実験、といった内容が述べられている。YAMAHA の MIDI 機器がとりあげられているのが興味深い。

こうして見ると、連載記事は、ロックの歴史から、ジャズやブルースといった周辺ジャンル、さらに電子機器の使用法まで、多種多様な知的要求に応えようとしていることが分かる。

6) ディスコグラフィ

音楽雑誌にはディスコグラフィは欠かせない。『我愛搖滾樂』にも何種類かのディスコグラフィが掲載されている。たとえば「EYE CANDY」の欄に「最佳搖滾唱片封面 THE 100 GREATEST ALBUM COVERS」として 100 枚の名作アルバムのレコードジャケットの写真が紹介されている。

⁵ Elvis Presley”That’s All Right”,Billy Lee Riley”Red Hot”,Carl Perkins”Blue Suede Shoes,Gene Vincent”Be-Bop-A-Lula”,Buddy Holly”Oh,Boy!”,Eddie Cochran”C’mon Everybody”,Billy Swan”I Can Help”,Dave Edmunds”I Hear You Knockin’”,The Cramps”Goo Goo Muck”,Stray Cats”Rock This Town”の 10 曲が挙げられている

⁶ 1955 年ソニーが初めて携帯式トランジスターラジオを生産、1956 年 Ampex 社がマルチトラック録音技術を実用化、翌年エレキギターのレスポールが初めて 8 トラック録音を実施、という 2 記事

「不只是設計、還有音樂」と説明にあるように、ジャケットデザインの奇抜さだけでなく、音楽の良さも選択の対象となっているようだが、もっとも多く選ばれたのは、ビートルズで、“With the Beatles” “Sergent Pepper’s Lonely Hearts Club Band” “The White Album” “Abbey Road” の4つ。ただメンバーのソロとしてはPlastic Ono Bandの“Live Peace in Tronto 1969”のみで、ジョンの「イマジン」や「ダブルファンタジー」もポールとジョージの数多くのソロアルバムもいずれも入っていない。ビートルズと並ぶ4つがローリング・ストーンズで、“Sticky Fingers” “Exile on Main St” “Some Girls” “Tattoo You” が選ばれているが、メンバーのソロアルバムは選ばれていない。

それ以外はほぼ2つ取り上げられているアーティストが並ぶ。エルビス・プレスリー “Elvis Presley” “50,000,000 Elvis Fans Can’t Be Wrong”、ボブ・ディラン “Bringing It All Back Home” “Self Portrait”、レッド・ツェッペリン “Led Zeppelin” “Houses of the Holly”、デビッド・ボウイー “Aladdin Sane” “Diamond Dogs”、ピンク・フロイド “The Dark Side of the Moon” “Wish You Were Here”、ブルース・スプリングスティーン “Born to Run” “Born in the USA”、トーキング・ヘッズ “More Songs about Buildings and Food” “Remain in Light”、マイケル・ジャクソン “Thriller” “Dangerous”、U2 “War” “The Joshua Tree” である。

有名アーティストは大体1つは取り上げられているが、2つとりあげられたアーティストの注目度が比較的高いということなのだろう。

興味深いのは、クリームは“Disraeli Gears”しか取り上げられていないが、メンバーのギタリスト、エリック・クラプトンとドラマーのジンジャー・ベイカーが、クリーム解散後に、ステイヴ・ウィンウッドを加えて結成したブラインド・フェイスのたった1枚きりのアルバム “Blind Faith” が取り上げられ、そのステイヴ・ウィンウッドのソロアルバム “Arc of a Diver” もまた取り上げられていることである。合わせれば3つとなり、系列グループとしての注目度が高いことがわかる。

取り上げられているジャケットを概観すると、女性の裸体が多く、続いて特殊メイクや写真のトリックを使った奇怪なイメージがそれに次ぐ。全体として、何らかの主張をもったジャケットが注目されたということかも知れない。音楽としては素晴らしくても、ジャケットのインパクトとして弱いアルバムは、やはり注目度が落ちるのである。レコードジャケットをそれ自体として、音楽から切り離して、アートとしてみよう、という考え方は、西洋でも日本でも一般的であり、たとえばカルロス・サンタナと横尾忠則のコラボレーションは有名であるが、ここには入っていない。中国におけるロック受容の初期における情動的アンバランスの結果であるのだろう。

さて、ディスコグラフィのPart2は「NEW RELEASE」である。新譜紹介は国内国外をバランスよく配置するものであるが、『我愛搖滾樂』創刊号では、西洋の新譜ばかり12点が紹介されている。

Bruce Cockburn	Breakfast In New Orleans Dinner In Timbuktu	一个民谣歌手的政治生命
Bottle Rockets	Brand New Year	酒吧中的细语：我爱摇滚乐
David Bowie	Hours	摇滚者永远是年轻
Live	The Distance To Here	还我本来凶狠面目
Bloodhound Gang	Hoorays for Boobies	傻瓜万岁！
Madder Rose	Hello June Fool	优美的另类之声
Nine Inch Nails	The Fragile	风格依旧，水准则不可同日而语
Tori Amos	To Venus And Back	一个女权主义者不经意的真情流露
Superchunk	Come Pick Me Up	注意：未被注意的独立摇滚超级大块头
Sting	Brand New Day	一颗永不生锈的螺丝钉
Iggy Pop	Avenue B	越老越有希望
Paul McCartney	Run Devil Run	新瓶旧酒亦醉人

日本でもよく知られているのは、デビッド・ボウイー、ナイン・インチ・ネイル、スティング、イギー・ポップそしてポール・マッカートニーくらいで、他のアーティストについては、あまり知られていないのではないかと。しかしここに「Tori Amos」が紹介されているのは注目すべきであろうと思う。この女性歌手は中国の多くのアーティストから、影響を受けたアーティストとして名前が挙げられているからである。私がこのアーティストの存在を知ったのも、丁薇というシンガーソングライターが、2000 年頃 Channel[V]のインタビューを受けたときに、名前を挙げたのが印象に残って、それをきっかけに、その後、他のアーティストの口からも彼女の名前を聞いたので、興味を抱いた。

このディスコグラティには、表の右列にあるようなキャッチコピーとともに、比較的詳しいアーティストの解説がついているが、その執筆者は編集者の一人張勇(彼が海外アーティスト担当なのだろう)である。彼もこの女性シンガーに注目していた一人だったということなのである。

ディスグラフィの Part3 は、「吵死人唱片 A-Z」で、これについては、すでに連載のところで紹介した。

7) グラビア



図 1

ロックの専門誌として、グラビアページは当然バンドやアーティストの写真に掲載することになる。創刊号は、JOAN JETT, PRODIGY, MOTÖRHEAD の 3 アーティストの写真が 1 枚ずつ掲載されている。なかでもエレキ・ギターを立てて、胸に抱えるように抱いて座っている JOAN JETT の印象的な写真には、“I LOVE ROCKN’ ROLL!” というキャプションがついている。雑誌のタイトルが、JOAN JETT のこのヒット曲に由来するものであることを端的に示している。(図 1)

これらは恐らくレコードのジャケット写真やポスターから複製したものと思われるが、編集部がカメラマンに撮影を依頼して、フォトアルバム風に記事化したのが、「VISUAL POISON 視覚毒薬」で、被

写体として選ばれたのは、盤古というバンドのパフォーマンス風景である。広州を活動の場とするこのバンドを、8枚のスナップ写真で紹介する試みである。1999年の8月から10月にかけて撮影されたもので、彼らの根拠地広州陳田村の部屋での練習風景やアートパフォーマンスと中山大学でのライブ、広州怡康樂村でのパフォーマンスが紹介されており、その過激な活動ぶりが窺える。盤古は後に写真集つきのアルバム「盤古」をリリースしているが、そこにも同じ写真が収録された模様である。カメラマンは、「新周刊」紙所属の馬嶺で、彼は邱大立から「中国ロックのNo.1カメラマン」と称えられたと、編集担当のxz（暁朱と思われる）が記している。

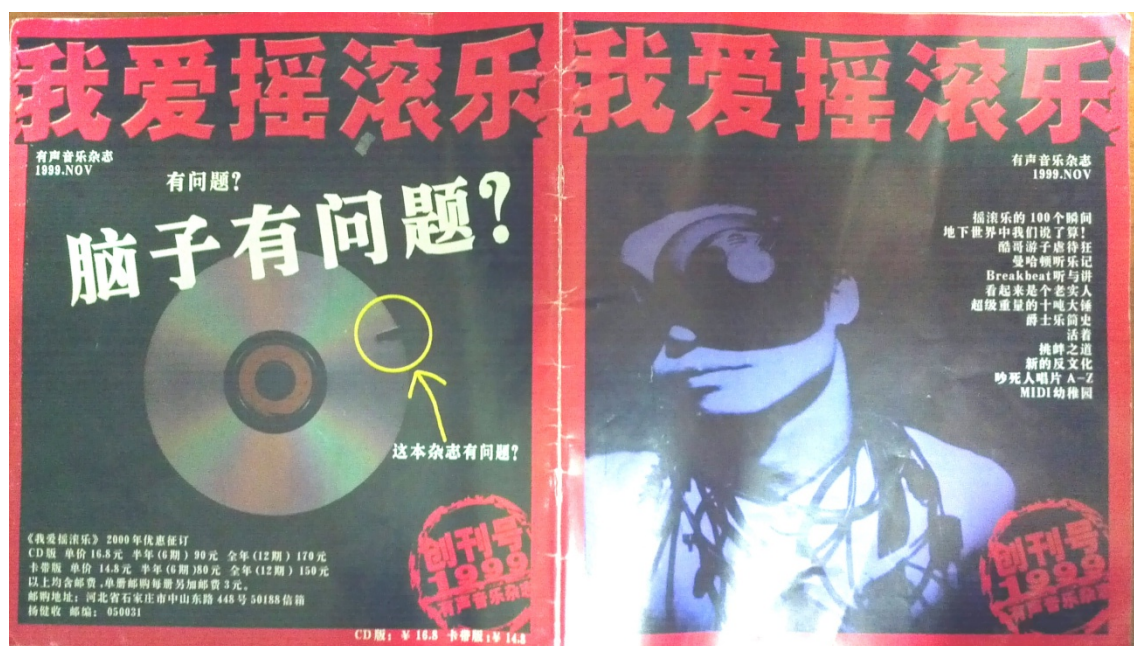


図 2

ついでに表紙のデザインについても触れておこう。表紙は今回は身体に電気のコードを何本も巻いた西洋人と思われる女性がヘッドホンの耳あてのようなもので目を覆っている胸から上の写真で、その女性の姿勢はダンスをしているように見える。裏表紙は、「有问题? 脑子有问题?」というキャッチコピーの背景に「打口盤」(廃棄処理のためカットを入れたCD)が写っており、そのカット部分を黄色い丸で囲み、黄色い矢印の元をたどると「这本杂志有问题?」とある。いくつかの記事や写真、そして付録の音源に著作権上の問題が存することを版面デザイン担当の張翼飛およびそれを採用した編集部は意識して、このような裏表紙にしたものと思われる。疑問符号がついていることから、やや確信犯的に法律上の微妙な問題があるけれども、あえてこんなやり方にしますよ、という宣言のようにも読める。

8) コラム

コラムもまた雑誌につきものである。『我爱摇滚乐』にも多くのコラムが見られる。もっとも大きなコラムは「Breakbeat 聴與講」で、Kinetic Science(動力科学)“Original Badman Ting”、Electrostatic(静電学)“Electron Gun”を紹介(7頁)したり、Breakbeat をめぐって、ブレイク

ダンス、ヒップホップ、ハウス、テクノ、ケミカルビートなど、様々なジャンルの紹介解説を試みている(26-27 頁)。

“NET SURFER”というコラム(担当: 曉朱)は、5つのロックサイトをトップページの写真と共に紹介している。“harmony-central”“ 揺滾年 ”“ 声音网络 ”“ Sleestak ”“ IUMA ”。

「音乐网络名词小典」(担当: 曉朱)は用語解説で、“Funk Metal”(疯克金属)“Industrial Metal”(工业重金属)が代表的バンド名とともに紹介されている。

「理論講場」では、ミュージシャン于微の「让心情去舞蹈」の記事があり、音楽とダンスの関係を歴史的に解説している。

「新模式主張」は、WEIGHTER の“IT”を主筆の王占峰が整理した形で掲載しているが、若者文化とスケートボードの魅力について語ったもの。

9) 発言

「発言」と銘打って、3編掲載されている。小七の「小七的自白」、朋克厭惡の「你他媽的別看我」、邱大立「有沒有這種活法?」である。小七の発言は、平凡で日常に流される自分にいらだちを感じている十代後半の男の子の迷いが表現されている。「毎日自分の箱に閉じこもって、ぼんやりと爆発を待っている」という言葉が興味を引いた。朋克厭惡のは、短編の文学作品のようだ。「俺はパンクだ」という言葉で始まり、一人称で語られる「俺」の生活は読み進むにしたがって、次第に一人の人間のことは思えなくなってくる。まるで「俺」にたくさんのパンクの亡霊が乗り移って語らせているかのようである。邱大立の文章は、北京の西北郊外にある樹村に田舎からやってきた若者たちが、普通に働くのではなく、楽器を運びこんで騒音を出している様子を傍観者の目から憂慮しているように書いているが、最後の言葉から好意的に捉えていることが知れ、市民の立場から、パンク青年に温かいまなざしをそそぐ主旨のようである。

・ 広告と価格

雑誌の運営と広告とは切り離せない。しかし、創刊号の広告は非常に少ない。表紙裏が「Canon 佳能」のデジタルカメラの全頁広告(写真は酒井法子)、裏表紙の裏が電子芸界(ELECTRONIC ARTS)による輸入車の広告、65 頁に「揺滾 T 恤店」68 頁に『欧米流行音楽指南』上・下、72 頁に楽器類の通信販売の広告が入っている。T シャツにしる、本にしる、楽器にしる、いずれも通信販売の連絡先は、この雑誌の地元河北省石家荘の個人になっており、この雑誌がローカルな雑誌として出発したことをよく表しており、広告収入の少なさと、CD やカセットを付録につけるという手間を考えると、その出発は赤字だったのではないかと推測される。

ちなみに『我愛揺滾樂』の価格は、CD 版が 16.8 元、カセット版が 14.8 元であった。読者確保の意味もあるのか、2000 年以降 CD 版は半年の定期購読が 90 元、1 年なら 170 元、カセット版は半年で 80 元、1 年で 150 元、いずれも郵送費込という割引も行った。残念ながら発行部数が明

らかでないので、どれくらいの収益を見越していたかを計算することはできない。

．まとめ

『我愛搖滾樂』創刊号の端から端まで内容を見てきた。編集者たちのコメントからわかるように、この雑誌は、中国のロック=搖滾樂を愛する人々が、中国における認知度の低さ、評価の低さに危機感をもち、行政の態度を変えることができないまでも、中国の庶民とくに若者層における認知度を高めようという意図のもとに創刊された。そしてその意図の通り、中国の若者が必要としているロック(あるいはパンク)な生き方、ロックの歴史やバンドと音楽の知識、ギターの演奏法まで、さまざまな情報を提供している姿が明らかになった。ときには自分たちの興味にひきつけ、ときには若者たちの要求を吸い上げながら、雑誌を運営していったのであろう。この雑誌が2013年現在すでに150号を超える継続性を保っているのは、彼ら編集者たちの努力によるものである。

残念なことに『通俗歌曲』のロック専門誌転換第一号を入手できなかったため、ライバル誌の比較分析はできなかったが、『通俗歌曲』が2000年代に入って幾度かスタイルの変更を行ったのに対して、『我愛搖滾樂』は誌面の大きさの変更を一度行なっただけで、ほとんどスタイルを変えていないことを考えると、雑誌を計画する段階での『我愛搖滾樂』編集部企画力と見識とが、証明されていると、言ってよいのではないか。その意味で『我愛搖滾樂』創刊号の分析は有意義であった。『通俗歌曲』との比較作業は、次の課題としたい。

参考文献

顔峻(著)『内心的噪音』外文出版社 2001.3

顔峻(著)『地下新音楽潜行記』文化藝術出版社 2002.7

顔峻(著)『燃烧的噪音』江苏人民出版社 2004.5

晓朱ら(編)『我愛搖滾樂』創刊号 中国青少年音像出版社 1999.11

王小峰 章雷(編)『欧美流行音乐指南(増訂版)』(A-K)および(I-Z) 南京大学出版社 2008.8

笔者已经讨论过把摇滚乐介绍到中国的刊物之一《通俗歌曲》⁷。在进行考察《通俗歌曲》的时候，一直在我脑子里的是作为《通俗歌曲》的竞争者《我爱摇滚乐》的存在。我一直在关注这两部刊物之间的关系如何，两者在中国的位置和意义有什么区别？

尤其是《我爱摇滚乐》创刊的 1999 年，就是《通俗歌曲》改编为摇滚乐专刊的那一年。看来这不是偶然的一致，会有好多的社会条件潜流在其背景。

因此，我想对《我爱摇滚乐》创刊号的概要及其意义加以考察，讨论《我爱摇滚乐》的内容及其创刊的目的。在这里我主要讨论《我爱摇滚乐》的创刊及其内容。

·《我爱摇滚乐》创刊的社会背景

《我爱摇滚乐》创刊于 1999 年 11 月。提前几个月已经改版为摇滚专刊的《通俗歌曲》就在一个月在其封面上第一次用“摇滚特刊”的几个字，公开表明该刊物是摇滚乐专刊。《通俗歌曲》又在 2000 年起在封面上开始用“中国摇滚第一刊”的字样，显示出对于《我爱摇滚乐》的对抗意识，似乎要向社会宣扬自己的刊物先办起了摇滚专刊。

看得出，差不多在这个时候，在出版界有关“摇滚”一词的禁令被解除了。在此之前，在“摇滚”的题目下，不能开演奏会，作为信息手段的刊物也不能把“摇滚”作为标题。

据香取义人的《中国摇滚 Database》，1990 年召开的第一届摇滚音乐节只能用“中国现代音乐节”的题目才得到召开。听说 90 年代为了培养摇滚音乐人创立的迷笛现代音乐学校也在校名中放弃“摇滚”一词才能建立的。

1989 年民主化运动时，在天安门广场做过演出的崔健，被北京行政当局不允许开大规模演奏会，一直到 2005 年为止。我们能看到动画的 90 年代早期的演奏会，也是以为癌症基金会捐资为借口才能实现的。

行政机关对于摇滚乐的如此的警戒和压力得到稍微缓解，似乎是从这个时候起。

·创刊的目的

主编晓朱在创刊号编者之页这样写着：

“什么时候摇滚乐在我们的社会中能真正被当作音乐对待呢——等我们的年龄可以当大人物的那年？不，应该是大人物都爱上摇滚乐的那一年——我们应该怎样做到这一点？——第一，告诉大人物摇滚乐很健康；如果不行，让大人物的小儿子喜欢摇滚乐；如果再不行，让所有有前途的孩子们都喜欢摇滚乐，然后等待其中一些人将来可以成为大人物。

“这是我的笨办法，所以我得做这普及工作。如果你有更好的办法，我听你的。

这里反映着，摇滚乐在中国还未得到认同，特别是“大人物”讨厌摇滚乐因为他认为摇滚乐不

⁷ <http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/dp2012-2aono.pdf>

健康等情况，而且乐迷们想改变这种情况。

另外编者之一张勇将乐迷叫做“摇族人”比喻为中国第 57 个少数民族。他说：

“我们人口稀少，生产力低下，又过于桀骜不驯，所以我族中人至今无人大代表，亦无自治区，更未享受过党温暖的民族政策。但我族儿女一贯坚决拥护党的各项英明决议，紧密团结在党中央的周围。我们同您一样认真执行计划生育政策，抵制法轮功，讨厌李登辉。我们同样也是出身苦大仇深的阶级弟兄。其实，我们真的和您一样可爱。

“我们的民族音乐 摇滚乐似乎并不是很受全国人民欢迎，这一点我们也很为难，我们的民族虽然不像各兄弟民族那样历史悠久，但这是我们的一种民族生活方式，万不可坏了族规，这一点只有请您见谅了！

这位编辑人衷心希望，摇滚乐迷既要维持自己的生活方式，同时又作为中国公民得到认可。

看得出，两位编辑人的发言虽然有微妙的不同点，但在认为摇滚乐迷是少数派，摇滚乐在中国还未得到认同，国内还有一些对于摇滚乐的偏见等等地方，形成了明确的共识。

这个共识和我在开头提到的摇滚乐逐渐解禁的当时情况有微妙的偏离。《我爱摇滚乐》编者们这种略带悲观的自我分析，反映着对于行政机关显得开始逐渐解禁摇滚乐等情势，还不能认定其确凿，但他们是要努力让摇滚乐在社会上、政治上得到认可。

. 编辑系统

刊物的编辑系统在目录页有记载。由“镭典丽声”来制作，由“中国青少年音像出版社”出版。有关人员为“监制：李跃 不丹、出品人：何雷 李威、宣传：张渤洋”。他们似乎是出版社的人。主编：晓朱、编辑：张勇和张翼飞、版面：张翼飞、发行总监：于小青。以上似乎是编辑部的人。另外还有几位主笔：黄义彤、阿飞、马永、颜峻、孙仲旭、杭天、迭高、董鹏、郝舫、胡凌云、王占峰、于微等。颜峻是噪音电子音乐的乐人，也是有关地下摇滚乐的传道者，曾经出版过这方面的几本书，是在这方面的代表性人物。他的存在对《我爱摇滚乐》的倾向有很大的影响。

. 创刊号的内容

《我爱摇滚乐》创刊号，版面有 280mm 长 × 250mm 宽（长度和 A4 相同，宽度和 B5 的长度相同），后来从第 16 号起改为 A4 版。除了封面，一共有 72 页，页数虽然不大，但把文字尽量放小，以便拥有许多信息量。目录上的题目一共有 38 件，其内容正反映着当时中国的摇滚乐实际情况，值得一提。

1) 有声音乐杂志

目录上的第一个题目是“曲目介绍”，但打开该页标题竟为“本期曲目”。在封面的刊物名下面提示“有声音乐杂志/1999NOV”，该刊物创刊第一期就附送卡带或者音乐光盘，所以刊物的第一个

内容应该是附送卡带或光盘的介绍。⁸ 90年代的《通俗歌曲》只有印刷的杂志，虽然它在里面介绍一些歌曲的乐谱，但不能听到所介绍的曲子。如果到音像店找一找，那在流行音乐、古典音乐和中国民间音乐的唱片堆中，或许可以买到摇滚乐的光盘或卡带。但那并不一定是杂志上所介绍到的那一个新手或者那一首最新歌曲。要解决这种摇滚乐迷的急不可待，有声音乐杂志是一个最好的对症下药。

“本期曲目”所介绍的音乐人和曲目是，马军《放肆一把》、清晰度《改变》、沉睡《真的语言》、智幻乐队《影子》、敏感之花《两面》等，都有歌词、音乐人简介和照片。另外限于光盘的内容有“新音乐杂志”精选，是介绍5组音乐人（Suede “Everything Will Flow”、Placebo “Pure Morning” “Every You Every Me”、Lamb “B Line” “Alien”、张亚东“只爱陌生人”、高旗“1999” “漫遊 2003” “出发”）的新歌片段。其中，高旗“漫遊 2003”可能是“太空 2001 遨游”的误记。据记载，这个“新音乐杂志”精选是“北京音乐台 FM97.4”的“新音乐杂志”节目的DJ张有待所选曲，是刊物要和广播媒体的音乐节目合作的一种战略。“本期曲目”里边还有“特别举荐”栏目，介绍了Marc Pattison “Idiot Box” “Sentinel of the Matrix”，还在“摇滚名人祠”栏目介绍The Doors “The End”的歌词，提出Chuck Berry的名曲“Johnny Be Goode”作为“吉他模范曲”。提出这个名曲是杂志的末尾以“吉他殿堂”为题目介绍其吉他演奏法的伏笔。如此看来，《我爱摇滚乐》的版面结构，是要促进或者引导摇滚乐的听众读者变成摇滚乐的表演者。

因为“本期曲目”的笔者是主编晓朱，所以选曲上似乎反映他的嗜好，尤其本期的选曲只能说过于偏向不太被群众接受的艺术摇滚、先锋摇滚之类的作品多一些。DJ张有待的选曲却妥当一些，选了群众容易接受的作品。比方说，张有待选择了王菲的制作人张亚东，尤其选择王菲的名曲《我只爱陌生人》的亚东版，会引起读者的注意。超载乐队的主唱高旗的两首新歌也是刚刚出来成为话题的。不过THE DOORS和CHUCK BERRY都是摇滚乐的古典乐手，为摇滚杂志创刊号的选择是极为妥当的。

顺便说，对抗这个刊物的《通俗歌曲》后来也付赠光盘，好像是为了赶上《我爱摇滚乐》的独跑。后来附带音像资料的杂志成为21世纪中国的音乐杂志的主流。其他音乐刊物，比方说《摩登天空》等也带光盘、卡带的。哪一部刊物最早付赠光盘、卡带方面，还要进行调查。

2) 介绍音乐人

本刊物介绍音乐人的方式有两种，一种是采访，另一种是纪事报告。

采访有DJ张有待采访张亚东的“走在流行和摇滚的边界——新音乐杂志张亚东专访”、中国第一个女子朋克乐队HANG ON THE BOX的“‘挂在盒子上’的乐队”、“活着——王凡访谈”、左小祖咒的“What’s Cool 我是城里一枝花 Flower In The Town”等等。给日本NHK连续电视小说《あまちゃん》作主题曲的大友良英，有采访同时还有纪事报告；颜峻和李劲松采访的“I HATE MY PAST!——大友良英访谈”⁹和颜峻写的“看起来是个老实人——大友良英在北京”。

⁸ 价钱也按CD版(16.8元RMB)和卡带版(14.8元RMB)不同

⁹ 此采访也收在颜峻[2004]

这些采访的内容没有篇幅加以详细介绍，但要简单地概括在下面。张亚东所谈的内容主要是作为制作人制作王菲和窦唯专辑时的话题为多，他对王菲的艺术才能给予很高的评价。挂在盒子上的王悦所谈的内容涉及到在高中组乐队时的周围的反应，很有趣。当时她们还没出唱片，不是很有名的乐队，但是打扮得另类的少女们通过弹着乐器大声喊叫的行为能赚钱的意外和“叫人看”的快感、家属们的不放心等等情况是在世界上也是普遍的现象。其实鼓手杨帆很悲观地说，“我们的乐队没有未来”。左小祖咒的采访者是主笔之一王占峰，话题是“农民是怎样进城的”。左小祖咒谈第一次进城时的花衣服、现在的舞台服装和他的帽子。大友良英回答颜峻的问题说：他跟学院派的音乐家不同，一步一步自学的，但日本学院派的代表武满彻对大友的音乐感兴趣，愿意和他合作。我认为把武满彻称为日本学院派的代表不太确切，因为武满也是自学音乐理论的，所以武满有可能对于大友的音乐看出自己年轻时的样子。王凡 86 年当兵，90 年复员，在兰州过两年后，自以为比别人唱得好，成为歌手了。朋克、重金属都唱过，后来开始“意识流”唱法。王凡说：“我脑子里就是有音乐的。我从小就是这样，从小就能看到音乐，我看见的是光，光的声音。”这是看到声音带颜色的感觉即“共感”王凡因此对音乐是非常敏感，对音乐的要求很高，很久找不到适当的配乐手。后来有 3 次割臂自杀未遂过。

编辑张勇到纽约采访英国跳舞系电子音乐队 Orbital（轨道）打听他们音乐的特点、和俱乐部音乐的区别何在等等，写了“穿梭在电子世界的轨道”。

如此看来，采访纪事介绍音乐人可以说是非常确切的。那么纪事报告怎么样？

报告的第一篇是主笔阿飞写的“谁是舌头？”。文章描写，舌头乐队成员的 6 个年轻人，1997 年从新疆维吾尔自治区来，住在北京西北角的树村，后来开始演出，被《南方周末》评为“1998 年最令人目眩的乐队”。但报告的后半部分只顾描写树村和摇滚乐的概况，在内容上稍微散漫。编辑张勇一共写 4 篇报告，即“PAVEMENT 地下世界中我们说了算”“酷哥，游子，虐待狂：Howie B”“超级重量的十吨大锥 MACHINEHEAD”“摇滚的《撒旦诗篇》”。

除了主笔和编辑以外，还有一位叫 Luke 的人写“曼哈顿听乐记”，是按照纽约时报周日版所介绍的到处去听演出的报告，内容以布鲁斯、爵士乐、百老汇歌舞剧等丰富内容装在 2 页里。另外还有似乎用笔名“随便”写的“少年老成的 Buck Cherry”与“风格拼盘高手 The Flaming Lips” 2 篇。

采访的有国内音乐人多一些，报告文章有海外音乐人多一些。这可能是因为编辑部的所在和人的组织自然而然形成的倾向，但无论如何，我们看得出《我爱摇滚乐》的编辑部注重在国内外活跃的音乐人构成版面。

3) 文化批评

重要内容还有批评。虽然是摇滚乐的杂志，但批评并不仅仅是有关摇滚乐的批评。比方说，“观点”栏目有 1 篇题为“大炼钢铁”，用“吉祥”做笔名对中国社会猛烈开刀，说：新音乐人士中，没有多少人能让表走时准确...乐评人阐述着那些磨皮蹭痒的文字概念游戏...中国人在改革了 20 多年后，还是不改往日的内耗与崇洋的品性...改革开放可以说是一次物质上真正的大跃进，人们仿佛要

把文革时失去的精神生活都替父母补回来，一下子来得那么快，那么多，追赶时代这班车的步伐太快了，难免出现车祸，原因大致是超载行驶或者超速行驶...之类的话，甚至把《我爱摇滚乐》也骂了一顿。无聊写的“SHIT HUMOUR”本是投稿的栏目，但创刊号只能由编辑部来找到5篇笑话，都是有关国内外摇滚乐手、酒吧或者唱片店的插曲。作为摇滚迷，好多读者可能体验过的可笑或者黑色幽默的场面，但对于我们外国人来说，有点难懂。易懂的有“盗版店见闻”之A，是作者看到过的外国乐队可笑的汉译名字，比如说，Nirvana 你妈呢、Kiss 磕死、Metallica 莫答理她、Duran Duran 都烂都烂、Guns N' Roses 干死个骡子。

《挑衅之道》和《新的反文化》是正统的文化批评。

《挑衅之道》是主笔之一郝舫写的，文章从美国科罗拉多州的一个法官提出“噪音条例”的新闻开始，谈到因为对于噪音的认识是千差万别，所以这位法官的提议有所不合理，而且据雅克·亚达利的话说是“一部音乐史，就是噪音被容纳转化传播的历史”，有关朋克讲到“无论对朋克的解释如何花样繁多，这种对美的否定之后创造出的新的‘美学’方式”。

《新的反文化》是笔者不详，由胡凌云翻译的一篇。以伍德斯托克和嬉皮士为象征的美国反文化潮流随着教父们已经过世后，新的反文化潮流发生在网络上，有上万个嬉皮青年集合摇滚音乐节或者BURNING MAN等达达主义艺术节。他们的特点为政治上的平淡，但要让他们开始政治活动，那禁止HIP-HOP或重金属就好了，那样他们就会站起来。

这些文章一定可以为中国的年轻读者提供智慧和好奇心的满足与娱乐。

4) 特辑

杂志总有个特辑纪事。每一期以特辑为特点来引起读者的注意。但《我爱摇滚乐》创刊号没有明确的特辑栏目。其实，翻了翻杂志，就容易看得出，版面上，大门乐队提得稍微多一点。

前面讲过，从“本期曲目”中的Jim Morrison的照片和The End的歌词开始，介绍大门乐队的《打开这扇奇异的Doors》，还有“所谓诗歌”栏目中，Jim Morrison的4篇诗¹⁰及其汉译为止，对于大门乐队的关注是很明显的。这些文章对于读者印象很深的是Jim Morrison作为诗人的天才和其他乐手们在音乐倾向上的一致，但那并不是这位诗人所希望的，后来诗人到巴黎客死在那里。但是我们日本的听众，比较习惯于认识Jim Morrison是毒品的常用者而致死，所以文章没提到他和毒品的关系是有点奇怪。他写的诗也是被毒品飞走的意识让他写的话，不提它也是偏离事实的。是不是考虑官方检阅而自我节制了吗？

5) 连载纪事

定期刊物总有个连载纪事。这是在一定的时间中，提供有分量的信息。可以说是显现编辑部态度的一个项目。

比如说，主编晓朱写的《摇滚乐的100个瞬间》是给乐迷提供摇滚乐历史的知识，按照年代提

¹⁰ 即“Dawn's Highway”“An American Prayer”“Black Polished Chrome(Latino Chrome)”“Angel and Sailors”的4篇。

出摇滚乐史上重要的几个事件加以解释。这一次是：

1954.7.5 猫王进入太阳唱片公司

1955.3.21 《黑板丛林》首映（主题歌 Rock Around the Clock）

1955.5.21 查克·贝瑞录制了“MYBELLENE”。

1955.7.9 帕特·布恩的“Ain't That A Shame”进入了排行榜。

1955.9.14 小理查德录制了“Tutti Frutti”。

1956.3.10 “伤心旅馆”引发猫王狂潮

在栏目内还有小栏目《十大经典 Rockabilly 歌曲》¹¹和《技术成就》。¹²

主编晓朱还开始连载“吵死人唱片 A-Z”，这次是 A，共介绍了 11 个乐人或乐队，其中除了比较有名的 AC/DC “High Voltage” (1976), Aerosmith “Aerosmith's Greatest Hits” (1980), Alice Cooper “Love It To Death” (1971) 以外都是不太红的乐手，这里反映着主编晓朱的音乐嗜好。

连载之 3，是主笔之一杭天的《蓝调传奇》，杭天自己也是布鲁斯的乐手，所以他在此介绍其知识。这次的题目是“与魔鬼同行的 Robert Johnson”。

连载之 4，《爵士乐简史》，这本来是 Dan Morgenstern 写的文章由仲虚翻译成汉语，第一回的内容为爵士乐的概要、起源、布鲁斯的诞生、铜管乐队和拉格泰姆、新奥尔良、早期音乐家等等。

连载之最后，是疯爵士写的《MIDI 幼稚园》（上）这是介绍数码电子乐器的规格 MIDI (Musical Instrument Digital Interface) 的知识和有关数码乐器操作的入门知识为目的。第一回题为“MIDI 概论”讲述，什么是 MIDI、基本操作如何、GM 音源诞生的历史背景、GM 的概要、XG 系统的实验等等。主要是依靠 YAMAHA 的 MIDI 乐器来讲述，可见日本音乐产业在电子乐器方面的优势。

如此看来，连载的纪事是从摇滚乐历史、爵士乐、布鲁斯等周边音乐，一直到电子乐器的使用方法为止，为了适合多种多样的需求而组版面的。

6) 介绍唱片

音乐杂志不可缺少唱片的介绍。《我爱摇滚乐》也有几种方式的唱片介绍。比方说，“Eye Candy”栏目有“最佳摇滚唱片封面 THE 100 GREATEST ALBUM COVERS”。这里介绍的是 100 个名作唱片封面的照片。标题下写着“不只是设计，还有音乐”，显示着选择的理由，不仅仅是封面设计的艺术性，音乐的好坏也要考虑。如果是这样，评价最高的要归披头士，选中“With the Beatles”“Sergeant Pepper's Lonely Hearts Club Band”“The White Album”“Abbey Road”4 张专辑。拆乐队之前，披头士成员独立出的只选中 Plastic Ono Band 的“Live Peace in Tronto 1969”，约

¹¹ Elvis Presley “That's All Right”, Billy Lee Riley “Red Hot”, Carl Perkins “Blue Suede Shoes”, Gene Vincent “Be-Bop-A-Lula”, Buddy Holly “Oh, Boy!”, Eddie Cochran “C'mon Everybody”, Billy Swan “I Can Help”, Dave Edmunds “I Hear You Knockin'”, The Cramps “Goo Goo Muck”, Stray Cats “Rock This Town” 的十首歌。

¹² 1955 年索尼公司生产了第一台便携式晶体收音机。1956 年安排克斯公司的同步录音技术进入实用阶段，一年后 Les Paul 进行世界上第一次八轨录音。

翰列农的其他专辑（比如“Imagin”“Double Fantasy”等）和保罗、乔治的许多专辑一律没有选中。和劈头士一样被选中 4 张专辑的还有滚石乐队，“Sticky Fingers”“Exile on Main St”“Some Girls”“Tattoo You”，看来，作为乐队评价和披头士一样高，但成员独立专辑一律没选中。

其它音乐人被选两张专辑的占多数。例如猫王“Elvis Presley”“50,000,000 Elvis Fans Can't Be Wrong”、Bob Dylan“Bringing It All Back Home”“Self Portrait”、Led Zeppelin“Led Zeppelin”“Houses of the Holly”、David Bowie“Aladdin Sane”“Diamond Dogs”、Pink Floyd“The Dark Side of the Moon”“Wish You Were Here”、Bruce Springsteen“Born to Run”“Born in the USA”、Talking Heads“More Songs about Buildings and Food”“Remain in Light”、Michael Jackson“Thriller”“Dangerous”、U2“War”“The Joshua Tree”。

有名音乐人的专辑似乎至少也选一张，但选两张以上的音乐人跟选中一张以下的音乐人比较起来，受欢迎的程度显得高一点。

有意思的现象是 Cream 乐队只选中“Disraeli Gears”，但成员吉他手 Eric Clapton 和鼓手 Ginger Baker 解散乐队后和键盘手 Steve Winwood 组织的乐队 Blind Faith 只出过一张专辑却被选中，后来 Steve Winwood 出的个人专辑“Arc of a Diver”也被选中，合起来一共三张，可见此系列乐队受很大的欢迎。

乍看所选专辑封面，女人或少女的裸体占多数，接着是用特殊打扮或者照片花招的怪异图像占多数。总的来说，还是有思想性的封面会引人注目。虽然音乐上有所成就，但没有轰动性的封面，就不容易引起听众的注意。把唱片的封面看作独立的艺术，是在欧美和日本是有所公认的看法，甚至如同 Santana 和横尾忠则那样的合作是比较普遍，其实他们的作品没有选中，可能是由于中国早期介绍摇滚乐上的信息偏离所导致的结果。

下面讨论唱片介绍的第 2，“NEW RELEASE”。介绍新出唱片时，国内和国外各占一半为通例，但《我爱摇滚乐》创刊号只介绍欧美的 12 张新唱片。

Bruce Cockburn	Breakfast In New Orleans Dinner In Timbuktu	一个民谣歌手的政治生命
Bottle Rockets	Brand New Year	酒吧中的细语：我爱摇滚乐
David Bowie	Hours	摇滚者永远是年轻
Live	The Distance To Here	还我本来凶狠面目
Bloodhound Gang	Hoorays for Boobies	傻瓜万岁！
Madder Rose	Hello June Fool	优美的另类之声
Nine Inch Nails	The Fragile	风格依旧，水准则不可同日而语
Tori Amos	To Venus And Back	一个女权主义者不经意的真情流露
Superchunk	Come Pick Me Up	注意：未被注意的独立摇滚超级大块头
Sting	Brand New Day	一颗永不生锈的螺丝钉
Iggy Pop	Avenue B	越老越有希望
Paul McCartney	Run Devil Run	新瓶旧酒亦醉人

除了我们日本人所熟悉的 David Bowie、Nine Inch Nails、Sting、Iggy Pop、Paul McCartney 之外，其他一半的音乐人是不是不太有名？不过，我以为介绍 Tori Amos 是值得注意。因为这位女歌手，

有很多中国音乐人举她为受影响的外国音乐人。我第一次听到她的名字也是我偶然看到 Channel[V] 的节目中有一个创作歌手丁薇提到她的名字，后来有很多中国乐手也提到她我也很感兴趣。

如表上提示的那样，每个音乐人除了唱片封面图片和表格的右边写的一句简单的介绍之外，还有比较详细的个人档案。这个栏目的笔者是编辑之一张勇（好像是他负责海外音乐人），由此可见，他也是注目这个女歌手的人之一。

唱片介绍之三是“吵死人唱片 A-Z”，关于这个栏目已在上面讨论过。

7) 图片



图 1

作为摇滚专刊，要在图片页上登载乐队和乐手的照片。创刊号选择的是，JOAN JETT, PRODIGY, MOTÖRHEAD 的各一张照片。其中，竖着电吉他抱在怀里坐着的 JOAN JETT 的照片，给人印象深刻，照片上面提示她的名字和“ I LOVE ROCKN’ ROLL ! ”的字样。这是她的主打歌的题目，也是这个《我爱摇滚乐》杂志名的来源。（图 1）

这 3 张图片恐怕是抄自唱片封面或海报上，但“Visual Poison 视觉毒药”是编辑部让摄影家拍摄构成为照片日记形式的。拍摄对象为广州摇滚乐队之一盘古乐队。试图将在广州活动的这支乐队，用 8 张照片来加以介绍。照片是从 1999 年 8 月到 10 月之间拍摄的，主要内容是，在他们根据地广州陈田村的排练和行为艺术、在中山大学的演出、广州怡康村的演出活动，从此读者能看到他们“过激”的活动情况。盘古乐队后来除了附带照片集的专辑，似乎也采用这次拍的照片。摄影师是属于《新周刊》杂志的马岭，据笔者 XZ（可能是晓朱）解释说，是被邱大立（参见下面“小栏目”一章）称为“中国摇滚第一摄影师”。

顺便讨论封面设计吧。创刊号封面是一张外国女性的照片。她似乎用耳机当作眼罩来戴着，身上绕着几条电子线条。她的姿势看起来好像在跳舞似的。封底用的是打口盘的照片，并在打口处加个黄色圆圈注释“这本杂志有问题？”封底刊名下也有大写的“脑子有问题？”“有问题？”等字样，象征着中国的摇滚乐介绍的背景，也意味着设计这张翼飞和编辑部都意识到本刊物的编辑上和附录音乐的著作权的处理上还存在着许多问题。在“有问题”后面加一个问号，或许可以认为，虽然他们意识到有许多问题，但他们还是敢这样做的意思。

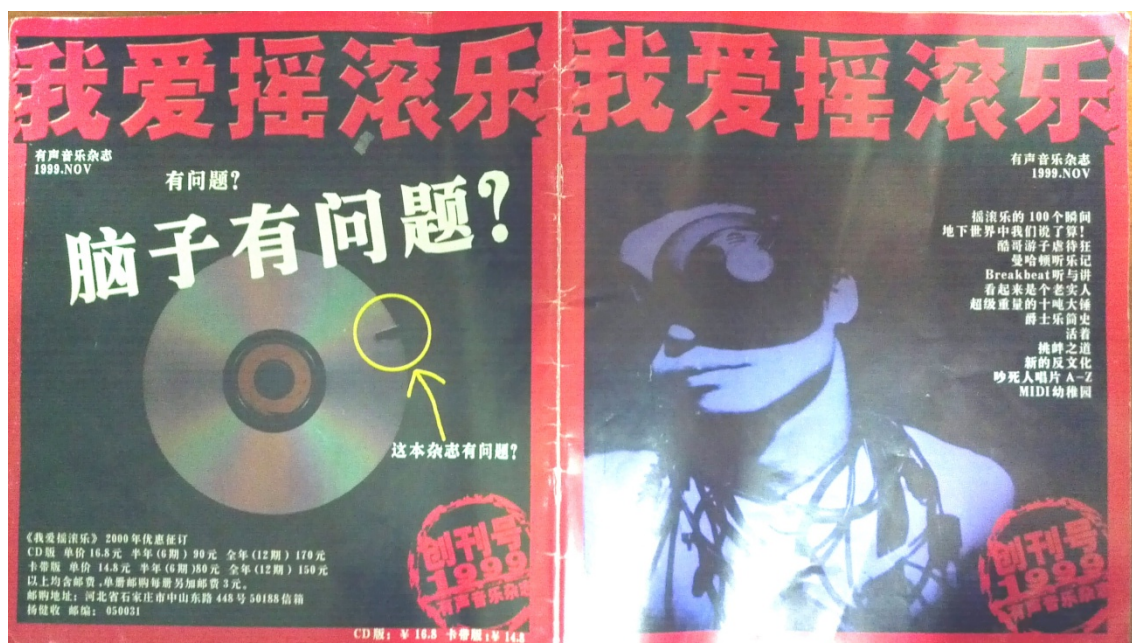


图 2

8) 小栏目

杂志总有一些小栏目。《我爱摇滚乐》也有许多。规模最大的要举“Breakbeat 听与讲”，这个栏目本来好像是读者提问编辑部回答的意思吧，但这次只有介绍几个欧美乐队和围绕 Breakbeat 对 Breakdance、hip-hop、housemusic、techno、chemical beat 等词汇和各种各样的体裁加以解释(6-27 页)。

“NET SURFER”(由晓朱编)介绍“harmony-central”“摇滚年”“声音网络”“Sleestak”“IUMA”等 5 个摇滚网站。

“音乐网络名词小典”(由晓朱编)解释摇滚术语，介绍“LO-FI”“Funk Metal”(疯克金属)“Industrial Metal”(工业重金属)，并介绍各代表性乐队。

“理论讲场”登载由音乐人于薇执笔的文章《让心情去舞蹈》，主要从历史的角度讲解音乐和跳舞的关系。

“新模式主张”将 WEIGHTER 写的“IT”由主笔王占峰加以整理登载，内容讲年轻人文化和滑板运动的魅力。

9) 发言

以“发言”为题目登载 3 篇文章。

小七《小七的自白》，写的是十几岁的男孩子对于平淡无奇充满虚伪的日常生活的焦躁，甚至他“每天躲在自己的盒子里，无望地等待着爆炸”这句话印象深刻。

朋可厌恶写的《你他妈的别看我》像一篇文学作品。从“我是个朋克”这一句开始，用“我”来讲述的生活，读着读着好像不是一个人的事情似的，仿佛是很多朋克的幽灵跳神一样付在他身上让他讲述那样的感觉。

邱大立《有没有这种活法？》，乍看似乎，把从农村来到北京西北郊外树村的年轻人们搬进乐器出骚音的情形，从旁观者的眼光描写，对他们表示忧虑，但最后一句充满着对于他们的温暖之情，为朋克青年们表示拥护。

. 广告与价格

杂志在经营上跟广告离不开。但是《我爱摇滚乐》的创刊号上的广告似乎太少了。封 2 有 Canon 佳能数码相机的广告（模特为酒井法子），封 3 有电子艺界（ELECTRONIC ARTS）进口车的广告，65 页有“摇滚 T 恤店”68 页有《现代流行音乐指南》上下册的，72 页有乐器类的广告。无论邮购 T 恤、书本还是乐器都是通信地址为杂志编辑部所存在的河北省石家庄，表示这部杂志作为一部地方性杂志出发，考虑到广告收入之有限，附加光盘或卡带的麻烦，很有可能他们一开始是不是亏本经营？

顺便说，《我爱摇滚乐》的价格，CD 版每一册 16.8 元，半年订购 90 元，全年订购 170 元。卡带版每一册 14.8 元，半年订购 80 元，全年订购 150 元。除了单册收 3 元邮费以外，订购价格是包括邮费的。不过发行量没说清楚，所以不能计算他们期待着多大的利益。

. 结语

我初步考察了《我爱摇滚乐》创刊号的所有内容。从编辑们的话看得出，这部杂志是中国的热爱摇滚乐的人们，对于中国人对摇滚乐的知识的浅薄、对于摇滚乐的评价之低，怀着危机意识，要提高摇滚乐在中国人民当中的了解度而创刊的。他们显示了根据自己创立杂志的目的，给中国青年提供他们所需要的有关摇滚或者朋克的生活方式，摇滚乐的历史，或者乐队和音乐的知识 and 吉他的演奏法等等姿态。他们有时候按照自己的兴趣，有时候对应青年们的要求，把刊物经营下去。这部杂志一直到 2013 年的现在已经数 150 号，他们这种继续性只有靠他们编辑部的努力才能做到的。

很可惜，我这次没有拿到《通俗歌曲》改为摇滚专刊的第一号，所以没能做到两个好对手的比较分析。但是《通俗歌曲》在 2000 年代有过几次编辑体制上的改变，《我爱摇滚乐》除了有一次改了版面的尺寸以外，几乎没有改变创刊时的姿态，证明了筹备创刊时的《我爱摇滚乐》编辑部的规划能力和对于摇滚乐和中国社会读者大众的认识是正确的。

参考文献

- 顏峻(著)『内心的噪音』外文出版社 2001.3
顏峻(著)『地下新音樂潛行記』文化藝術出版社 2002.7
顏峻(著)『燃燒的噪音』江蘇人民出版社 2004.5
曉朱等(編)『我愛搖滾樂』創刊號 中國青少年音像出版社 1999.11
王小峰 章雷 (編)『歐米流行音樂指南(增訂版)』(A-K)和(I-Z) 南京大學出版社 2008.8

The Leading Rock Magazine in China: Reflections on the Very First Issue of *Wo Ai Yaogun Yue* (November 1999)

AONO Shigeharu

概 要

中国にロックを紹介した刊行物『通俗歌曲』を分析しているとき、ずっと『我愛搖滾樂』のことが気になっていた。このライバル雑誌の関係や中国の音楽業界における地位はどうなっているのかを考察しなければならないと考えていた。とりわけ『我愛搖滾樂』の創刊された 1999 年は、『通俗歌曲』がロック専門誌に改編を行った年であり、それは偶然の一致ではなく、さまざまな要因が背景にあったと考えられる。そこで『通俗歌曲』に関する考察を基礎とし、両者の共通点や違いを明らかにすることは意義のあることだと考える。ここでは、その視点から、『我愛搖滾樂』の創刊号に分析を加え、その創刊の意義を明らかにする。

提 要

当我对于把摇滚乐介绍到中国的刊物《通俗歌曲》作考察的时候，《我爱摇滚乐》这刊物一直悬在我意识当中，让我思考此两部刊物的关系和在中国音乐界的地位如何。尤其创刊《我爱摇滚乐》的 1999 年，就是《通俗歌曲》改为摇滚专刊的那一年，这不会是偶然而然，而可能有各种各样的因素在其背后。因此，把有关《通俗歌曲》的考察作基础，对于《我爱摇滚乐》进行考察，要将两者的共同点和差异弄清楚。

(担当委員：宮原 曉 *)

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>